

## 文化

◀ 小さ子のものがたり 前回(6月7日付、連載286)は、「竹取物語」のいわば語り起しのところ終わってしまった。竹取の翁が竹林から連れ帰つてた小さな子の児を妻「姫」(おつね)とともに育てるうちに、この児、三月ばかりになるほどに、よき程なる人になりぬれば、……髪上げさせ、袴(も)着ることなく、この児の容貌(めいよう)のかな世にならぬ。児の内は、暗き所なく、光り満つたり」と物語は記している。

ところで、柳田国男は、「一寸法師譚」のはなしに触れて、「平神半人の小皇子が最初極度に小さく、後のち驚くべき成長ぶりを示して〔る〕」とし、同じような説話に、西洋ではグリムの「蛙の王子」や、わが国の「田螺(たにし)の長者」もあると述べている(『物語と語の物』一九四六・昭和二十一~年)。ただ、一寸法師の場合は、十二、三歳までは少しも成長しなかつたという伝承もあり、竹取のかぐや姫は、特別だつたのかもしれない。

柳田は、また同じところで、「吉明神に傳(いの)つて申し児を得たといふ「一寸法師の老いたる親」と同じように、「竹の中から羅く姫君を見付けた」という竹取の翁の物語

は、「ちひき子の古伝の一例には相違ない」のである。かぐや姫が「幼神・養ひ神」として、翁の夫婦のもとに育てられたことは、本稿の前回にも見たところである。

▼『桃太郎の誕生』と『桃太郎の母』 柳田国男は、先の「一寸法師譚」のところで、「天和洪水の折、初瀬川大に漲り、大甕流れ来て三輪の社頭に止る。土人(どちびと)聞き

八年)を引く形で、次のように述べている。

「古くはスクナヒコナの神話から、かぐや姫、瓜子姫、桃太郎、一寸法師などのお伽(こぎ)はない、ある。田は言う」(『桃太郎の母』)。

お伽話の筆頭に「わがかぐや姫」が挙げられているのは、なんとも心強いたことである。

また、石田柳田の数々の論考は、根底をつらねる要素として、「これら的小童が何らかの形で水界と係をもつ場合が甚だ多い」ことを指摘しているのも注目される(『同前書』)。

一方で、高橋勝のよう、竹取のかぐや姫は、他の類話のように動かない、旅にも出なければ化け物退治とも無縁で、瓜子姫のようには結婚もしないから、「小さ子の昔話にはあたらぬ」とする研究者もある(『語らさるかぐや姫』)。

▼姫の成長と命名 「この子(の)大きくなりぬれば、名を、御室(みむろ)秋田を呼びて、吉明神に傳(いの)つて申し児を得つけます。秋田、なよ竹のかぐや姫とつけます。この三日うちあけ遊ぶ。よろづの遊びをそしける。男はつけきらはず呼び集へて、いとかしこ遊ぶ」。

柳田国男は、「桃太郎の誕生」で、興味深いことを記している。「更に一つの申し児信仰の痕跡は、斯うして瓜の中から生れ出た赤兎を、何れの昔話に於いても悉く

見るに玉の如き」男子あり……」

見るに玉の如き」男子あり……」

文化人類学者の石田英一郎は、柳田の「桃太郎の誕生」(一九三三・同八年)を引く形で、次のように述べている。

「古くはスクナヒコナの神話から、かぐや姫、瓜子姫、桃太郎、一寸法師などのお伽(こぎ)はない、ある。田は言う」(『桃太郎の母』)。

お伽話の筆頭に「わがかぐや姫」が挙げられているのは、なんとも心強いたことである。

また、石田柳田の数々の論考は、根底をつらねる要素として、「これら的小童が何らかの形で水界と係をもつ場合が甚だ多い」ことを指摘しているのも注目される(『同前書』)。

一方で、高橋勝のよう、竹取のかぐや姫は、他の類話のように動かない、旅にも出なければ化け物退治とも無縁で、瓜子姫のようには結婚もしないから、「小さ子の昔話にはあたらぬ」とする研究者もある(『語らさるかぐや姫』)。

▼姫の成長と命名 「この子(の)大きくなりぬれば、名を、御室(みむろ)秋田を呼びて、吉明神に傳(いの)つて申し児を得つけます。秋田、なよ竹のかぐや姫とつけます。この三日うちあけ遊ぶ。よろづの遊びをそしける。男はつけきらはず呼び集へて、いとかしこ遊ぶ」。

柳田国男は、「桃太郎の誕生」で、興味深いことを記している。「更に一つの申し児信仰の痕跡は、斯うして瓜の中から生れ出た赤兎を、何れの昔話に於いても悉く

## な ら 民俗通信

287 西村 博美

## 神に依りて来る子供 竹取の民俗

かぐや姫のものがたり (その一)



かぐや姫のものがたり (その一)  
一方で、高橋勝によく見られる信仰の「幽かな痕跡は、よほど注意しないであろうと指摘している(『瓜子姫』)。

柳田が残した多くの論考の中に見られる信仰の「幽かな痕跡は、よほど注意しないであろうと指摘している(『瓜子姫』)。

柳田が残した多くの論考の中に見られる信仰の「幽かな痕跡は、よほど注意しないであろうと指摘している(『瓜子姫』)。



柳田国男の『桃太郎の誕生』(左)と石田英一郎の『桃太郎の母』

今は座敷ラジオをはじめとする地方の俗信など、連の伝承を貫いて、靈廟(れいびょう)など、百姓の家で、たといいないのである。としている。かぐや姫が「幼神・養ひ神」として、翁の夫婦のもとに育てられたことは、本稿の前回にも見たところである。

▼『桃太郎の誕生』と『桃太郎の母』 柳田国男は、先の「一寸法師譚」のところで、「天和洪水の折、初瀬川大に漲り、大甕流れ来て三輪の社頭に止る。土人(どちびと)聞き八年)を引く形で、次のように述べている。

「古くはスクナヒコナの神話から、かぐや姫、瓜子姫、桃太郎、一寸法師などのお伽(こぎ)はない、ある。田は言う」(『桃太郎の母』)。

お伽話の筆頭に「わがかぐや姫」が挙げられているのは、なんとも心強いたことである。

また、石田柳田の数々の論考は、根底をつらねる要素として、「これら的小童が何らかの形で水界と係をもつ場合が甚だ多い」ことを指摘しているのも注目される(『同前書』)。

一方で、高橋勝のよう、竹取のかぐや姫は、他の類話のように動かない、旅にも出なければ化け物退治とも無縁で、瓜子姫のようには結婚もしないから、「小さ子の昔話にはあたらぬ」とする研究者もある(『語らさるかぐや姫』)。

▼姫の成長と命名 「この子(の)大きくなりぬれば、名を、御室(みむろ)秋田を呼びて、吉明神に傳(いの)つて申し児を得つけます。秋田、なよ竹のかぐや姫とつけます。この三日うちあけ遊ぶ。よろづの遊びをそしける。男はつけきらはず呼び集へて、いとかしこ遊ぶ」。

柳田国男は、「桃太郎の誕生」で、興味深いことを記している。「更に一つの申し児信仰の痕跡は、斯うして瓜の中から生れ出た赤兎を、何れの昔話に於いても悉く